を集めて開催されている。

野性生物のスタディーと言語、社会、算数その他の学科を組み合わせた小学校教師のためのシリーズも、ある財団の後援によって設定され、そのために動物園の教育専任スタッフは、シアトル、ワシントン、バージニア、カンザス、ミズーリ、イリノイ、アーカンザスなど米国中の講座を巡回指導している。

世界野性生物保護協会（WCS）と共に種の保存のための国際会議を開催し、グローバルな情報発信や情報収集に努めている。一九九八年には、世界中から五百人以上の教師や生徒、野性生物の専門家や研究者等を招請して、教育を通じた野性生物保護に関する第二回南北アメリカ国際会議が、WCSのウエッブサイト上のバーチャル会議センターを使用して開催され、学校での野性生物の保護教育などに関する提案が、三十八カ国の関係者から寄せられるという情報機能を駆使したものとなった。

また、パプアニューギニアでは、州の教育局と共同で地元の百十一人の教師のための環境教育ワークショップを運営したが、二〇〇二年までには、現地の四百五十人の教師、六万五千人の生徒に教育指導を行い、カリキュラムを浸透させる計画である。ニューヨーク市内の学校の生徒は、一九九八年時点では、四十六万人余りが環境教育の一環として動物園を訪れ、そのうち四万人余りがいろいろな教育プログラムを受講している。

また、欧米の特徴のもう一つは、子供動物園が充実していることであり、楽しい分かりやすい、そして正しいプログラムが用意されていて、いきなり動物を触らせるという形は殆どとっていない。前もって、映像やイラストなどによって予備知識をインプットしておくのだが、映像やゲームを駆使しながら楽しく学ぶ仕組みが整っている。さらにファームズーといった家畜を正しく理解するための充実した施設も用意されていて、日常生活の何気ない動物とのかかわりを喚起させてくれる。

ここに示したものはほんの一部であり、アメリカの動物園の、環境教育の取り組みは、その内容や、取り組み体制等の厚みは日本の比ではない。

6 動物の故郷でも生命を守りながら

世界野性生物保護協会（WCS）は、動物園、その教育プログラムや調査研究及び国際的な野性生物保護活動のための基盤として設立されたいわば実際の行動媒体のための母体であり、現在その会員は九万四千人以上である。

国際的な野性生物の調査研究、保護活動は、アジア、オセアニアでは、百十一カ所、アフリカでは、九十六カ所、北アメリカでは、三十一カ所、南アメリカでは、八十八カ所、と合計五十カ国、三百二十六カ所のフィールドに及んでいるが、例えば、プロジェクトのなかには、インドネシアのコモドドラゴンやオランウータンの調査研究、保護活動などがある。また、現地の活動家や研究者の支援を行ったり、加速度化している絶滅危険種のために緊急に、現地政府と連携して野性生物のサンクチュアリーをセットアップするなど、実際のフィールドで専門スタッフが汗を流している。

こうして、動物の原産国での地道な環境保護情報が世界中から寄せられ、さらに現地の人々の生活の実態についてもリアルタイムな状況を知る事ができるネットワークが、ユニバーサルな動物園活動を可能とする。

一言で言えば動物を交換して国際交流をする一昔前の活動を終えて、動物の故郷の環境を守り、人々の暮らしのあり方にまで心を配る国際貢献活動をずっと前から展開しているのである。そうした堅固な理念や具体的な行動が、国際的な信用と何よりも市民の信頼を得られるもとになっている。まだまだ、人材の派遣が十分ではない日本にとっては羨ましい限りである。

7 動物園の復活

錆びついた檻、狭くて殺風景な小屋、冷たいコンクリートの床、寒さにうずくまる動物たち、始終右往左往する猛獣、侘しい売店、人間にだけ便利な動物園からの脱皮が近代動物園の表面的な課題であった。日本の動物園は、特にそうだった。欧米は早くから、掘割、モートを使った広い展示方式を導入し動物学に根ざした種の保存、野性生物保護、調査研究、環境教育、レクリエーションのバランスのとれた施設としての発展に努め、今その地道な努力は、環境の世紀といわれる二一世紀の大きなよりどころとしての地位に繋がるものとなろうとしている。自然史博物館のライ

広大なシロクマの展示場

（タコマポイントデファイアンス動物園）

動物の視線で

（ニューヨーク野生生物保護公園）

ブシステムとして当然のことである。

しかし、動物園不要論は、根強いのである。膨大な投資と動物の消費、そんなにまでして必要なものなのか？ならば、その投資を総て動物の故郷の環境保護政策にあてたらという素朴な問は私のなかにもあったのだ。とは言うものの、人口の爆発、加速度的な開発、民族紛争、飢餓の連鎖等政治、経済の構造的な問題が解決されない限り単一的な環境保護政策への資金投入だけでは、全くの焼け石に水なのである。

こうしている間にも熱帯雨林は加速度的に減少している。誰でもがアマゾンの密林に行かれるわけではない。誰でもがアフリカの草原に旅することはできない。しかし、感じなければならない、地球が危ないということを。

バーチャルな自然、映像には限界がある。美しい動物の耀きも、匂いも、植物の香りも、風のそよぎも世界そのものを身体全体で感じ、とらえることはできない。

今、動物園は誰もが動物の、植物の生息地をできる限りリアルに感じられる努力を惜しまない。楽しみながら、快適なサービスのもとに世界を感じさせる努力を続けている。生命の神秘の解読に、動物の繁殖に日夜、世界中で活動しているその代表選手が動物園である。アメリカでは、動物園入園者が回帰してきている。一九七〇年代からの展示革命と環境問題へのたかまりがマッチして、本格的なレクリエーション施設、人間、動植物の共通のアメニティー施設として復活したからである。資本主義最先端の国、アメリカで復活したのである。

8 理想の動物園を

百聞は一見にしかず。サンディエゴへ、シアトルへ、ニューヨークへ行くことがあったなら、ズー見物、そう見物、物見遊山の気持ちで良い、難しいことを考えずに話の種か暇つぶしぐらいの想いで動物園を覗いてみよう。ブランドの店を歩き回るよりずっと面白い体験ができるだろう。

まず、センスの良い、家まで持って帰りたい案内マップが手に入る。何でも訊いてみよう、片言の英語でも、きっと笑顔に逢えるだろう。まるで、アートのようなデザインの動物のサイン、写真などまず無い。インフォメーションセンターには牙が抜かれて倒れている血だらけのサイの写真があるかもしれない。表には動物の言い分が、ひっくりかえすと人間の言い分が書いてあるサイン、さてどちらの言い分が？

ジョークに沸くガイドつきのバスでまずは一回り、それから目をつけたところをのんびりと周る。西アフリカのゴリラの森へ、東南アジアの密林の渓谷へ、雪豹のヒマラヤの高地へ、アフリカのサバンナへ、白熊の夏の極地へ、もう何処へでも探検家となって、少年のようにときめいて自然のなかに溶け込める。携帯電話の音が恥かしい、邪魔な世界が待っている。ビデオのレンズはすっかり曇り、自分の眼で見るジャングルツアー、洒落たレストランで手軽な食事、オリジナルグッズのユニークなデザインは、クレジットカードでオーケー。また来るためのチケットはいろいろあって、ズーフレンドになれば一年中のフリーパス、客用のゲストパスや家族用のファミリーパスも格安で、イベントやパーティーへの案内や動物のデータなども送られてくる。立派な年報で動物園の一年が分かりやすく説明されている。ボランティアの申し出も喜んで受けてもらえるし。奉仕時間を証明してもらうと減税にもなるし。いろんなメニューが揃っている、こんな楽しい動物園がアメリカにあるのだからあえて、理想の動物園を描く必要も無いだろう。

もちろん、調査研究、保護活動の厚みは日本の比ではないけれど。

早く日本にもそんなソフトが充実した動物園が欲しいものだ。

〈企画局次長・プロジェクト推進課長　元・緑政局動物園等担当課長〉

誰もが太古の森へ行く

（シアトルウッドランドパーク動物園）

アートともいえるハチドリのサイン

（サンディエゴ動物園）